

いもう 葦毛通信

平成 27 年 3 月 6 日
豊橋市文化財センター
TEL : 0532-56-6060

No. 19



ミスミソウ

1、春の芽吹き

葦毛湿原では、例年 2 月末から 3 月初めの雨の後に、アズマヒキガエルが産卵します。撮影のタイミングが悪く、今年は産卵中の写真は撮れませんでした。しかし、今年は珍しく、ノスリの写真を撮ることができました。ノスリは産卵するヒキガエルを狙っているようで、湿地脇の藪から飛び出して、近くの木にとまりしばらくこちらを見ていました。藪の中からはガサガサという音が聞こえていたので、あるいはアズマヒキガエルがいたのかもしれませんが。2010 年に食べられた個体を見たことがあります。毒がある頭の部分を残し



アズマヒキガエルの卵 (2 月 28 日)



ノスリ (2015 年 2 月 28 日)



食べられたアズマヒキガエル (2010 年 2 月 28 日)

て、皮と骨以外の胴体部分がきれいに食べられていました。

アズマヒキガエルが産卵すると葦毛湿原の春が始まり、花も順番に開花していきます。もう、ショウジョウバカマは咲き始めました。湿原のあちこちで咲き始めています。ハルリンドウも大きくなっており、早ければ来週あたりには開花しそうです。



ショウジョウバカマ



ハルリンドウ

2、平成 26 年度中間報告一4

N・O・J 地点は木の伐採、除草、島状部の除去がほぼ終わりました。これで今年度の木の伐採はほぼ終了の状態です。3月はまだ春です。植物の発芽や開花が始まるので湿地内部にはできるだけ入らないようにします。今後は部分的に表土を剥ぐ試掘を J 地点で行い、各地点の後片付けや自然歩道・木道の補修等の整備作業を中心に行っていきます。

J 地点の西側には A 地点から流れ込んでくる小さな沢があり、東側には I 地点からと O 地点から流れ込んでくる小さな沢が合流しています。J 地点中央部は、この東西の沢に挟まれてやや高くなっています。南端の木道近くは湿地になっていますが、乾燥化が進みネザサが優勢になっています。J 地点中央部は常緑樹を中心に伐って、明るい森にしました。表面の落ち葉等のマット状の被覆はできる限り除去するようにしています。

J 地点中央部の真ん中あたりに、東西方向に溝が掘られていることが分かりました。地境の溝の可能性がありますが、何を目的にしたものかはわかりません。また、南側では水がしみ出してわずかに低く、小さな湿地状になっているところも見つかりました。明るくなることにより、良好な湿地になると思われます。J 地点では、ヒメコヌカグサ、ミヤマウズラ、オオバノトシロソウがわずかに見られましたが、明るくなることにより数が増えると予想しています。この他にも、埋土種子からどのような植物が出現してくるのかを観察していく予定です。

J 地点の南側は良好な湿地に面した部分で、現在はネザサが優勢になっていますが、10 cm ほど堆積しているネザサの根を除去すると、礫が目立つ裸地になることが平成 25 年度に作業を行った J-1 地点で確認されています。しかし、J 地点の北側は平らになっており、自然歩道が通っています。雨に下刻された自然歩道の路面や、沢の断面の地層を観察すると礫層が無く、堅いシルト質の土があることが分かります。つまり、J 地点の南にある礫層の分布は、北に向かって平らになるところまでで、その先には続かないことが予想できます。このように基盤となる地層が異なる場合、そこに自生する植物も異なる可能性が高いと予想できます。そこで、どの部分が良好な湿地に戻るのかを確認するために、J 地点に 1×1 m の試掘グリッドを複数開けていきます。南から北に向かって、水分の多そうな



J 地点北側作業前（北から）



J 地点北側作業後（北から）

所や、逆に少なそうな所などの異なった条件の所に 間隔をあけて設定します。これにより、地層の連続具合を確かめていきます。

考古学では、このように部分的に小面積を調査して全体の地層の連続具合を確かめて、どの層まで掘り下げるかを決めて調査を進めます。これは、グリッド法による試掘調査とよばれるもので、今回の作業に応用しています。おそらく、地質条件の違いから発芽してくる植物も異なると予想されますので、継続して観察していきます。



J 地点南側作業前（南から）



J 地点南側作業後（南から）

3、N地点表土剥ぎ取り実験

N地点の島状部で表土の除去実験地（N－1～4地点）を設定しました。島状部になっていたところは元水田だったことが分かりました。小規模な不整形をしていますので、手作業で耕作していたと言い伝えられている部分に当たります。強い攪乱から弱い攪乱まで表土の剥ぎ方を変えて、埋土種子から出現する植物に違いが見られるのかを確認します。

N－1地点：スコップで15 cmほど掘り起こして、表土を大きく除去しました。除去した土は中央に仮置きして山にしています。水田だった頃は、毎年春になると田起こしをして土を攪乱していたと思われます。水田耕作と同じような強い攪乱を与えた状態です。剥ぎ取り後、北側に水が溜まるようになり、アズマヒキガエルが産卵しました。水量が少なく干上がる可能性もありますので、その時は、卵やオタマジャクシを別の場所に避難させるつもりです。



N－1・3地点作業前（西から）

N－2地点：旧水田の表土を浅く5 cmほど剥いだところです。剥いだ土は奥に積んであります。N－1地点と剥ぐ表土の厚さを変えて埋土種子に違いがあるのかを確認します。



N－1地点（西から）



N－2地点（北西から）



N－3 地点（西から）



N－4 地点（南から）

N－3 地点：表面のマット状被覆をアメリカレーキで除去してから、先端のチップが飛んでダメになった刃を使い、草刈り機で地表面をわずかに削りました。わずかな攪乱で土の面をはっきり出すことを目的に行いました。

N－4 地点：イヌツゲ等の木の根を除去し、コシダ、ネザサ等のマット状の根を除去しました。根を掘り取るだけの攪乱を加えた状態です。

4、バックホーによる作業－1

2月18～20日の3日間バックホーを使用し、伐採した木の根の抜根と、ネザサ、コシダを刈り取ったところのスポンジ状の根の層を剥ぐ作業をしました。バックホーという重機を湿地の回復作業に使うことには、大きな抵抗があると思います。考古学の発掘調査においても同様で、かつて私が学生だった30年以上前には発掘現場に重機を入れることにまだ抵抗感がありました。すべての作業を、人力で行うことが良いとされていました。大きな重機を発掘現場に入れると遺構や遺物を破壊してしまうことが危惧されたからです。

しかし、工事に伴う遺跡の発掘調査が全国で行われ、面積も数千から数万㎡という単位で調査が行われるようになると、とても人力では無理だということが分かりました。そこで、バックホー、ダンプ、ホイールローダー、ベルトコンベアー等の様々な重機が使用されるようになり、その使い方についても様々なノウハウが蓄積されていきました。

発掘では、竪穴住居や穴などの遺構を探す時には、爪の無い平らな刃先のバケットを付けたバックホーを使い、少しずつ薄く剥くようにして掘っていきます。発掘作業に慣れたベテランの運転者になれば、2cm程の厚さで薄く剥いていくことができます。

今回の作業では、このような掘り方をしていません。抜根作業に適したバケットで行っています。何を目的に、どのような方法でバックホーを使用したのかという作業の具体的な内容については、次号で詳しく説明していきます。



L 地点でスポンジ状になったネザサの根を除去している所